

<研究ノート>

柴田勝家『雲南省スー族におけるVR技術の使用例』研究ノート

— スー族描写に体现する文化の溶け合う未来を求めて —

李 珊

一、序説

1. 作者柴田勝家について

本名は綿谷翔太、1987年東京都に生まれる。成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻所属し、外来の民間信仰の伝播と変容を研究していた。戦国武将の柴田勝家を敬愛するため、その名をペンネームにした。

『ニルヤの島』（2014年早川書房）によるハヤカワSFコンテスト大賞の受賞を皮切りに、作家デビューする。その後、次々と『クロニスタ 戦争人類学者』（ハヤカワ文庫JA）、『ゴーストケース 心霊科学捜査官』（講談社タイガ）などを創作し、SF界の賞賛を浴びる。

本研究ノートで扱う「雲南省スー族におけるVR技術の使用例」（2018年、早川書房）も第49回星雲賞¹⁾日本短編部門を受賞し、2021年「アメリカン・ブダ」²⁾第52回星雲賞日本短編部門を受賞する。

2. 作品「雲南省スー族におけるVR技術の使用例」について

中国南部の雲南省に住む少数民族スー族が、生涯VRヘッドセットを装着し、生命が存在する限りVR空間に生き続けるという奇妙な習俗が描かれ、一人称で語られる。語り手の詳細は告知されなく、ひたすら中国雲南省スー族自治区で調査活動を

続け、スー族の人々の出産・結婚・葬式・祭礼などの風習を考察した後日談の形で記録する作品である。VR空間に生きる人々はVR空間こそが自分たちの現実であるとし、実在の生命は現実世界で生きる配偶者の介護によるものとなる。いわばスー族人の身体は現実世界にあっても、精神世界はVR空間に限られると言う。かれらは生まれてすぐにヘッドセットを装着し、成人すると婚姻を結ぶが、配偶者となる者は主に近隣の部族から迎えられた女性である。その女性は介添人と言って、スー族村の人でないためヘッドセットを付ける必要はない。外部の人間と接触する場合は端童（ルートン）と呼ばれる案内役がいる。彼らは食事や場所の移動なども妻の手を借りるためヘッドセットを外すことはない。そして結婚、出産、祭礼、葬式といった冠婚葬祭も全てVR空間内で行われ、現実世界における衣食住の全ても簡素なものとなっている。

こうしたスー族人の生活を現地調査した語り手は、VR空間でのみ生活するスー族人と配偶者の見ている世界については、根本的に理解はできないと知りつつも、彼らの世界を尊重し、共に生きていこうとしている関係性の強さを感じ、それこそスー族人の文化の本質が浮き彫りにされているのではないかと考えている（p15）^①と述べている。

さらに、作品の結びでは、遠く離れたアメリカの大学で学生たちが中国の奥地の文化を知ってもらうためにスー族における調査記録をVRに通じて共有

1) <https://note-infomart.jp/n/n8e63ed1ea9a8> 2020年

2) 同1

の体験しようとしたところ、ある学生は次のように反応した。

大変貴重な経験でした。スー族に対する理解も大いに深まったように思います。しかし、疑問に思うのは、実際にスー族という民族が存在しているのかという点です。私は残念ながら、彼らの存在を資料でしか知りませんし、今回見ることができたのも、VR空間上で暮らす民族を訪ねるというVR空間での話でした。これではどこまでが架空の話で、どこまでが真実であるか判断が付きません。重ねて言えば、私は先生ともオンラインセッション上でしかお会いしておりません。そのせいか実在の方かどうか不安になってきました。(p16)

そしてこの反応に対し、語り手も学生と対話するのが確実な解説を与えるのではなく、次のようにこの物語を位置付けている。

スー族人間は、純粋な点と線で構成された、極めて霊的な世界で生きている。頭の中にしか存在しない世界。湧き出てくる情報だけを拾い集め、それを想像することで世界は生まれる。②

そしてまた私にとっては、あの学生達も単なる記号の連なりでしかない。私達は与えられた情報を、頭の中で想像した姿で補正している。「海」という文字を見て、海を想像できるのは海を知る者だけだ。しかし私は学生の彼らを知らないのだから、文字でしか彼らを判別できない。

文字だけで作られた世界。想像できる部分だけが存在し、想像できない部分は存在しない。これこそがスー族の人間の見ている世界に近いと言ったら、学生の彼らに理解してもらえるだろうか。③ (p16-

17)

すなわち、学生と語り手両者の意見交換からすれば、スー族人が実際に存在しているかどうかは不確定であり、架空なもの、想像したものの可能性も考えられる。そして語り手も「私たちは与えられた情報を、頭の中で想像した姿を補正している」(p17)し、「自作した籐座に腰掛けながら、文字列だけの世界に夢を見て、見知らぬ学生達の実在に想いを馳せ」(p17)ているだけなのかも知れない。

3、文化が溶け合う人類の未来像を求めて

柴田勝家の作品は従来、SF作家の観点からバーチャルリアリティー³⁾やサイバーパンク⁴⁾などのジャンルで研究されている。つまり仮想空間と電脳空間の物語として扱われている。本研究ノートに扱う作品もすでにエドワード・ジェームズ、ファラ・メンデルスゾーン⁵⁾、王紅梅⁶⁾、秦江鹏⁷⁾らに論じられているが、ここでは本稿との関連性を持たないかれらの先行研究を詳しく紹介しない。なぜならそれは筆者自身の視点からこの作品を新たなジャンルで読み解きたいからである。そのジャンルとは、SF作品を通して作者が人類の未来を展望する思想的寓意を読み解くことである。無論この方法は、SF研究の方法にふさわしいものではないように思えるが、「SF作家・柴田勝家氏インタビュー」⁸⁾を一読すると、これまでおこなってきた考察に確信が得られた。いわば作者は、中国南部雲南省のスー族が生涯VRヘッドセットを装着し、生命が存在する限りVR空間に生き続けるSF作品を描いた。そのスー族一族は、仮想のVR世界の中で暮らす、1920年代に中国政府が推奨した少数民族のSE(システム

-
- 3) バーチャルリアリティー (VR) とは、体験者に人工的に生成された環境を没入させ、その現場にいる臨場感を生起させる技術である。近年以来、VR技術は様々な領域で用いられており、SFの創作においても頻繁に描かれるものである。
- 4) サイバーパンク (cyberpunk) とは、「cybernetics」と「punk」が組み合わせた単語であり、初出は米国SF作家ブルース・ベスキにより発表した短編小説のタイトルである。後ほどその単語は一つのSFサブジャンルの名称として使われていた。
- 5) 爱德华・詹姆斯、法拉・门德尔松編2018『剑桥科幻文学史』百花文艺出版社
- 6) 王红梅2021「从博朋克科幻小说的空间隐喻」华中师范大学
- 7) 秦江鹏2022「“空间”到“元宇宙”虚拟现实科幻小说发展与流变研究」辽宁大学
- 8) 同1

エンジニア)技術者養成政策によってプログラマーが誕生された。かれらは数10年前からこぞって上海のIT企業に雇われる上、そのVR技術を用いソフトを開発し、自分たちのヘッドセットに世界最大の水力発電所がもたらす電力を走らせ、永遠に自分たちだけの世界に浸っていようとするのだ。そこには中国政府、IT企業、ソフト開発、少数民族、外部の世界と切り離すヘッドセットなどの表現がちらつくだけで、何らかの政治的メッセージや迫害的なイデオロギをほのめかしているように読まされてくる。だが、スー族人の文化と暮らしを考察しているうちに、作者の新たな人間感と世界観が浮かび上がってくる。とりわけ、異なる世界で生きる夫婦が価値観を共有しようとする描写および語り手とアメリカの学生がオンラインセッションで交流する描写などにおいても、作者は文化が溶け合う人類の未来像を構想する人間観と世界観が鮮明に写り出されているように思われる。よって本研究ノートは、作者の文化が溶け合う人類の未来を希求する寓意を明らかにすることは、勝家研究における多角的視点かつ総括的研究の論考に資すると信じたい。

二、スー族人の暮らしと文化

以下、上で述べてきたスー族村について考察し、かれらの誕生から、生態および終焉までのありようを作品の描写に基づいて、その暮らしと文化を明確にする。よって次章の分析で体現された寓意から作者の人間観と世界観を究明する。なお考察に用いるテキストは、電子版『雲南省スー族におけるVR技術の使用例』⁹⁾とし、原文で示された活字を正確な資料として扱い、ページ数を記さない。ところどころで段を変えることがあるのを言明しておきたい。

1、スー族人とその衣食住

①スー族人

中国南部、雲南省とベトナム、ラオスにまたがる場所に、VR(バーチャル・リアリティー)のヘッドセットをつけて暮らす、少数民族スー族の自治区

がある。

彼らは生まれた直後に、ヘッドセットをつけられ、仮想のVR世界の中で人生を送る。首長族としてしられるカヤン族が、幼少期から真鍮製の首輪をつけ、それを次第に増やすのと同時に、彼らもまた、長ずるほどに独自の装飾が施されたヘッドセットへとつけ替えていく。

スー族の人口は僅か六千人規模で、中国国内における少数民族の中では極めて少ない部類に入る。山岳民族としては珍しく、一地域に定住し、山羊の飼育と国内向けのソフト開発これ二〇年代に中国が推奨した、少数民族によるSE(システムエンジニア)技術者養成政策の賜物でもあるによって生計を立てている。

VRのヘッドセットをつけて暮らすというもの、元は数十年前に、この地のプログラマーがこぞって上海のIT企業に雇われ、その時に開発したVR技術を持ち帰ったのが始まりであったとされた。それ以降は、ベトナムやラオスを経由して運ばれ安価なヘッドセットを買い取り、スー族のプログラマーが自身で開発したソフトを走らせているという。そうして雲南省最大の、つまり世界最大の水力発電所がもたらす電力を使いつつ、彼らは永遠に自分達だけの世界に浸って生きているのだ。①

②その衣食住

衣：スー族の伝統衣装というものも、数十年前には存在したらしいが、現在では全ての人間が都会的いでたちをしている。②それというものも、彼ら自身がVR空間でのみ伝統衣装を着る方向へと変わっていったからだという。今では、伝統的な民族の装いとして残されているのは、年齢や職業によって差異を見せるヘッドセットだけとなっている。

食：食事の時ですらヘッドセットを外すことはなく、彼らは慣れた様子で介添人の運んできたものを籐座に腰掛けたま食べる。主食は山羊の乳で作ったチーズと麦だ③が、これはVR空間上であらゆる食物と香りが投影されるおかげで——これも現実とは異なるものを脳が勝手に補正するクロスモーダル知

9) 柴田勝家2017『雲南省スー族におけるVR技術の使用例』早川書房

竟の一例だ——何も不自由に感じていないという。彼らの生活はVR上で完結する為に、余計なものは一切必要ない④のだ。

住：スー族の自治区に入ると、まず目につくのが険しい山脈と茫々と生える緑の草、そして居留地の区切りを示す石造りの道標である。…家屋は石造りと土造りが混ざった形態で、村の中央に大家を意味するバジが存在する。バジは共同生活の場であり、スー族の人間は寝る時以外は、常にこのバジで暮らしている。

五色に彩られたバジは、一種の荘厳さがあるが、常にヘッドセットをつけている彼らにとっては、色も装飾も何ら意味を持たない。あくまで外部から来た人間に部族の伝統を示す目的でしかなく、実際、彼ら自身の個人家屋は簡素なものであり、一切の装飾がない。⑤

バジの中央では何人ものスー族が、籐座と呼ばれる籐製の独特の椅子に腰掛けている。彼らは身動きもせず、ひたすらVR空間に没入している。

2. 端童と介添人とその共存

端童と呼ばれる外部向けの案内役が出迎える。彼らは二人一組で行動し、一人は村の人間としてヘッドセットをつけているが、もう一人は取次役としてヘッドセットをつけていない——これは主に近隣の部族から迎えられた端童の妻などが担う。

端童はバジを案内役してくれ、共同生活の場としていかにそれが重宝されているのかを説く。山羊の鳴き声が聞こえるのは、このバジの裏手に放牧地があるからだとし、これらも外の部族から来た女性が介添人として面倒を見ているという。

スー族は独自に開発したVR空間を持ち、これは外部の人間では見ることは叶わないが、僅かに説明される限りでは、スー族の宇宙観ともいえる山を中心にした神話的風景の世界であり、距離と時間を問わず、村人のアバターが点在しているという。村の人間は物理的距離とは一切関係なく、その空間で互いに交流し、日々の生活を送っている。このVR空間は一つの集落だけのものではなく、山を挟んで複数存在する他のスー族の集落とも共有しているという。食事の時ですらヘッドセットを外すことはなく、彼らは慣れた様子で介添人の運んできたものを

籐座に腰掛けたま食べる。

彼らが席を外すのは用をたす時と寝る時のみで、介添人の女性の手を借りて移動をする。一見すると外部の村から来た人間が奴隷のように働かされているように感じるが、決してそうではない。スー族の人間にとって介添人の存在は自分達の世界と現実世界を繋ぐ、一種の神聖な存在として扱われる。⑥これは我々の世界にとっては、神霊の世界を物語る巫女やシャーマンと逆の位相にある存在ともいえる。より現実的な例ではオリヴァー・サックスの『色のない島へ』で語られる、先天性全色盲の島民の存在を思い起こさせる。その話では、全色盲の島民は決してマイノリティではなく、健常者の島民と対等な関係を築いているのだ。

このスー族の村で強く感じたのは、VR空間の中でのみ生きる者達と、実質的に現実世界での村を支える介添人の女性達との関係性の強さだった。彼女達の存在があつてこそ、この特殊な村は成り立っている。⑦

3. 恋愛と結婚、出産と子、葬礼と祭礼

①恋愛と結婚

スー族の生活で、最も興味深いのは結婚と出産の礼儀だ。

いくらかの村人は、よその民族の女性を妻に迎えることがあるが、それは代々、端童の職掌を担ってきた家系——この村では現在、三つの家族が相当していた——のみで、他の村人は同じスー族で他の集落に暮らす者を配偶者とする。彼らはVR空間の中で出会い、そこで恋愛をするという。少数民族的な風習とはかけ離れた、いかにも都会的な自由恋愛の先に婚姻があるのだ。そうしてVR空間で結婚の約束を取り交わすと、主として女性側が夫のいる集落を訪れる山越えを経ての婚姻である為、この時は集落の長老が特別に街のガイドを雇って、ヘッドセットをつけた花嫁を運ぶのだという。

結婚式もVR空間の中で執り行われる為に、外から見る限りはその行程は極めて質素だ。至って普通の格好で村に訪れた花嫁は、バジに招かれて、そこで座す花婿の肉体と出会うことになる。VR空間上では何度となく、両者はアバターを通じて触れ合っていたが、ここに至って初めて互いの肉体を知る。

しかし彼らにとって、肉体というのは単なる外部化された装置に過ぎず、そこには顔の美醜や体型の好みなどは一切関係ない。そもそも配偶者が婚姻によって村を訪れるのは、ひとえに子供を作るという即物的な目的の為であり、それを目的としないで、VR空間上のみで結婚を果たしたカップルも多く存在するという。⑧そして、そういった何組かのカップルは、実は同性であることが後から判明し、顔を合わせたくても合わせられない事情があると、端童の男性が面白おかしく語っていた⑨。

②出産と子

そういった複雑な恋愛関係の中で、無事に婚姻を果たしたカップルは次に子供を作る——当然、セックスの最中も互いのヘッドセットを外すことはない。そうして生まれた子供は、長老の次に権力を持つ産婆の元で、人生最初の礼儀を受ける。

つまり、ヘッドセットの装着である。

乳児用のヘッドセットも、このスー族が独自に開発したもので、巷に出回っているものではない。とはいえ同時期に何十人も乳児がいるわけでもない為、大体は使い回しである。

乳児がヘッドセットをつけるのは、首がすわる時期からで、そういったものは産婆が全て感覚で見計らうという。乳児の見える世界と齟齬のないように、機能は大きく制限されており、VR空間上に母親の乳首が判別できるような光点が表示されるのが、乳児用ヘッドセットの特徴だという。

こうして一度ヘッドセットを装着すると、以後は成長する毎に新しいものに付け替えられる。そして付け替えの瞬間でさえ、子供には目を瞑るように厳しく言い含める。この付け替えの時、スー族の人間は、目を開けると悪魔に魅了されると説く。目を開ける子供は「薄目で世界を覗いた者」を意味するスージンジンになると伝えられ、元の世界には帰ってこられないと脅かされる。こういったこともあり、ヘッドセットをつけ替える時もスー族の人間は外界の情報から身を守ろうとする。スー族の人間が現実世界を目にするのは、実に生まれてから僅か数カ月程度でしかない。

スー族の子供は大人と違い、バジの外に出ることも多いが、それでも一箇所に固まって座り、ヘッド

セットを通してVR空間上で遊ぶことになるスー族の人間が極めて貧弱な体つきをしているのも、ここに原因があるとする論文もある。とはいえ、歩行に支障がなければ、日夜籐座に腰掛けて暮らすだけで良いのだから、特別に体を鍛える必要もない。

③葬礼と祭礼

葬礼：村の広場では、とある老人の死体が、今まさに焼かれようとしていた。老人の葬礼には、介添人の女性以外は誰一人として参加していなかった。しかし、そう見えたのはこちらの世界の話であり、端童の話よれば、今もVR空間の中で老人の葬儀が執り行われているのだという。

老人の肉体は焼かれて灰に変わり、タッシブという白檀製の小さな櫃に入れられて、山沿いにある共同墓地の一角に埋められるという。これら一連の礼儀で最も重要なものは、老人がつけていたヘッドセットが取り外される瞬間であり、介添人の女性が死体からそれを外すのを見られたのは幸運だった。なんといっても数十年前にわたって装着し続けたものであり、それを外すのにも相当の手順が必要になってくる。

まず、既に後頭部でヘッドセットを結べると髪が複雑に絡んでいる為に、それらを丁寧に鋏で切り離す必要がある。ついで、綺麗な水で目の周りを濯いでいく。積み重なった垢と硬化化した皮膚によって癒着したヘッドセットを剥がすのは、並大抵の苦勞ではないように思えた。

ようやくそれが取り外された時、そこにあったのは厚い眼鏡のように盛り上がった眼輪筋と、小さくすぼまった脛だった。まるでモグラか地中の蛇のようだったが、この身体的特徴が見られるものも、ヘッドセットを取り外し、火葬に処されるまでのごく短い間だ。

積み上げられた薪の上に寝かされた老人は、そのまま凄まじい火力によって焼かれる。灰と煙が強い風に乗って、集落全体へと渡っていく。この間も、VR空間では、彼の為に村人達が祈っているのだという。

老人の使っていたヘッドセットがどうなるのかを端童に訊ねると、それもまた、ヘッドセット用の墳墓——これを彼らは黒座みろどと呼んでいた——に置かれ

ることになっており、そこには祖霊達だけの特別なVR世界が存在しているという。当初、これは宗教的な表現であり、生きている人間には知覚できない死者の為だけの存在かと思っていたが、そういうわけでもないらしく、現在生きているスー族の人間も、死者達のVR世界とはシームレスに行き来ができるのだという。^⑩

祭礼：スー族の祭礼劇であるワンパ節—その意味は「頭で考えたものを描く」だ——何より奇妙で、かつ何より荘厳な芸術であるといえる。

とはいえ彼らの祭礼とはVR空間で行われる、神との対話そのものを指すのだという。

夜半過ぎになると、バジに村人が集い、それぞれが籐座に腰掛けた。既に全ての扉が開け放たれ、夜の冷気が中へと入り込んでくる。薄ぼんやりと浮かぶスー族達の影が、次第にバジの五色の壁と一体化し、巨大な壁画のように見えてくる。

やがて長老が何事か呟くと、それを契約にスー族の人間達が言葉を朗唱し始める。それは今さまにVR空間で再現されている、スー族達の神話の風を読み上げているのだという。風景を読み上げるという行為も、彼らの見ている世界を理解できない者からすれば意味が通じないだろうが、端的に言えば、このバジに集まった全てのスー族があてがわれた風景の役を演じ続けているのだ。例えば一本の木の役を担う人間がいたとして、その人物は延々と木の描写を続ける。VR空間の中で木が揺れた瞬間に声を上げ、葉の一枚が落ちる度にそれを表現する。あるいは火や水の役から、踏まれる石段の役、流れる雲の役まで。一人ひとりが毎秒ごとに微細な動きを口にする。それが繰り返されることにより、壁画として取まった彼らが、言葉だけで刻々と変わる風景を形作っているのだ。人間の言葉だけで投影される絵画と言え、我々にも伝わるだろうか。

まさしくこれは、スー族の伝統の中で、外部へ自分達の世界を伝える為の手段として創始された祭礼芸術でもあったのだろう。ただ惜しむらくは、時代を経るにつれ、彼らのVR世界と我々の世界で物質に対する概念が変わってしまったのだろう。それは例えば、ある奇妙な唸り声を響かせている、ピワンと呼ばれる物質を演じる男性が、一体何を表現しているのか解られないといった具合だ。

しかし、そういった我々には及びもつかない世界観を抜きにしても、彼らの描き出す光景は幻想的だ。

幾人ものスー族が籐座に身を置きながら、外から入り込む星明かりの中で影となり、声だけで彼らの見ている世界を表現している。木々の揺れを呟く男がいれば、そこに差し込む太陽の光を声で表現する者がいる。女性の声は水の滴り、山を駆け上る山羊の蹄、その陰しさを語る石役の声、祭礼劇がクライマックスに近づくにつれ、彼らの声が無数に重なり合っていく。もはや音楽とも言えず、ただ大きな振動となってバジに響いていく。最後に長老が首を振りながら、風の神が村に訪れたことを語り、ワンパ節の祭礼劇は幕を下ろした。

風の神：「私達はもう何世代も、この世界で暮らしてきた。いまとなっては、私達が見ている世界が、そのまま貴方達の生きている世界の風景だとは思わない。ただ私が語った神の風だけは特別だ」

スー族の風の神は阿由という名で、姿形を示すものは何もないが、この世界と自分達の世界を橋渡しする神であるという。それはその通りで、ヘッドセットをつけて生きている限り、彼らが私達の世界に接続できる唯一のものは皮膚であり——味覚と嗅覚は、いくらでも模擬信号を送れるVR空間の前では大きな意味を持たない——その肌で感じられる神の息吹とは即ち風そのものだろう。

三、文化が溶け合う人類の未来像

1. 上の考察から、作者が描写された中国雲南省スー族人のありようは、おおむねイメージが浮かべられたのであろう。以下、奇妙に想像されたかれらの存在に体现された事象から、作者の人間観と世界観を究明し、その創作意図を読み解くことを試みる。

まずは〈二〉章の棒線①～⑩、それから〈一〉章の棒線①～③を分析する。

世界最大の水力発電所がもたらす電力を使いつづ、彼らは永遠に自分達だけの世界に浸って生きているのだ。^①

現在では全ての人間が都会的いでたちをしている。^②

①と②の内容からすると、スー族人は自身の生存

状態に満足しているが、決して変化を抵抗してはいない。かれらが自身達の自然な暮らしの中でスー族村以外の文化も順応しようとしていた。その「世界最大の水力発電所がもたらす電力を使いつつ」、「都会的いでだちをしている」描写がそう証明しているであろう。

主食は山羊の乳で作ったチーズと麦だ③

何も不自由に感じていないという。彼らの生活はVR上で完結する為に、余計なものは一切必要ない④
彼ら自身の個人家屋は簡素なものであり、一切の装飾がない。⑤

③と④と⑤では、スー族人がヘッドセットの精神世界の中で世界最大の水力発電所がもたらす電力を使い、都会的いでだちするようになったが、今まで通りに簡素な住居に住み、質素なままであっても不自由と感ずるものはない。その上、食生活においてもチーズと麦で健全な肉体を保っている。すなわち、スー族人は外部の文明を享受しながら自分たち固有の無欲の本質も失わないのである。

一見すると外部の村から来た人間が奴隷のように働かされているように感じるが、決してそうではない。スー族の人間にとって介添人の存在は自分達の世界と現実世界を繋ぐ、一種の神聖な存在として扱われる。⑥

このスー族の村で強く感じたのは、VR空間の中でのみ生きる者達と、実質的に現実世界での村を支える介添人の女性達との関係性の強さだった。彼女達の存在があってこそ、この特殊な村は成り立っている。⑦

そして⑥と⑦では、外部の人たちにしては、スー族人の配偶者となる者はヘッドセットをつけている配偶者を介護しなければならず、村の社会を支えなければならぬ。それはまさしく奴隷的存在にあると考えがちであろうが、事実、彼女達の存在があってこそ、この特殊な村は成り立ち、一種の神聖的存在として受け入れられている。さらにかれらは、どんな状況であろうと互いに深い信頼と尊重で結ばれ、強い絆を有している。かれらは互いの距離

をもつ空間において理解と助け合いの中で異なる役割を果たし穏やかな生活を営んでいる。それはまさに作者が我々に示唆する健全な夫婦関係ないし人間関係かのように思えてならない。

そもそも配偶者が婚姻によって村を訪れるのは、ひとえに子供を作るという即物的な目的の為にあり、それを目的としないで、VR空間上のみで結婚を果たしたカップルも多く存在するという。⑧
そういった何組かのカップルは、実は同性であることが後から判明し、顔を合わせたくても合わせられない事情があると、端童の男性が面白おかしく語っていた⑨

さらに⑧と⑨の場合は、⑥と⑦の夫婦関係を超えてスー族人の婚姻事情の内実は、外部の人々の想像にもつかないほど多様化している。そこにはスー族の種族継承の問題、同性愛の問題、自由恋愛、精神恋愛等々の問題が内包されている。それは実に開かれた合理的で自由な世界ではないか。どんな形の愛であっても中傷誹謗もなければ、断罪されることもない。しかも最も大切なのは他者に傷をつけることもないことだ。つまり寛容な世界であり、自然な人間体ありのままに受け入れられている。

現在生きているスー族の人間も、死者達のVR世界とはシームレスに行き来ができるのだという。⑩

最後の⑩では、何と神秘で霊的な世界であろう。我々の現実世界では誰も求めないものはいなからう。生死の世界に境界線がなければ、この悲哀に満ちている人類の死が多く喜びと美談もまた溢れることであろう。それはいわゆるスー族人の世界は死があっても終わりではなく、かれらはシームレスに行き来ができ、過去と現在を同時に享受し、死別を苦痛に恐怖に思ふ必要がない。その上、むしろある意味の解放と昇華を手に行き来できるということであろう。

次に〈一〉章2節の①～③を究明する。

根本的に理解はできないと知りつつも、彼らの世界を尊重し、共に生きていこうとしている関係性の

強さを感じ、それこそスー族人の文化の本質が浮き彫りにされているのではないかと考えている。①

「彼らの世界を尊重し、共に生きていこうとしている関係性の強さを感じ、それこそスー族人の文化の本質が浮き彫りにされている」とすれば、そこには作者が理念とする人間観が読み取れよう。いわば、二章の⑥と⑦で論じたような信頼と尊重、理解と助け合い、それぞれの役割を果たし、平和で穏やかな日常を営むスー族人は、互いの世界を尊重し、相互理解の疎通が得られなくても共に共存しようとしている。作者がそれをかれらの文化の本質として描き上げている。それはいうまでもなく、そこに体现されたスー族人のありようを唱え、紛争と分断の絶えない人類全般の共存を促しているように読み取れよう。

頭の中にしか存在しない世界。湧き出てくる情報だけを拾い集め、それを想像することで世界は生まれる。②

文字だけで作られた世界。想像できる部分だけが存在し、想像できない部分は存在しない。これこそがスー族人の人間の見ている世界に近いと言ったら、学生の彼らに理解してもらえらるだろうか。③

上の人と人の尊重と理解、強い絆のほか、②と③で語られている現象は、まさに我々が生存している現在の活字と電子による情報社会であり、「スー族人の人間の見ている世界に近い」とすれば、我々は先進国、後進国、文化人、原住民、大民族、少数民族などを果して語れるものなのだろうか。多くのものが各々の人の選ばれた情報で観念的にその情報を拡大し恣意に自己の想像する世界を作り上げてしまうことがないものだろうか。スー族人はヘッドセットの世界で、我々は情報と活字だけで、各々自身の頭の中にしか存在しない世界を作り上げてしまい、真実を見えなくなってしまう。

しかし、その世界は正しいのであろうか。〈一〉章でスー族のシステムエンジニアのプログラマーが「自分たちのヘッドセットに世界最大の水力発電所がもたらす電力を走らせ、永遠に自分たちだけの世界に浸っていくようにする」と紹介したが、作品では

次のようなエピソードも語られている。

「ある年に電力会社の問題でスー族の村に電力が届かなかった時があった。やがてヘッドセットの充電が切れ、このままではVR空間にいられない状況に陥った。普段であれば、村にある発電機でまかなうか、数人が使えなくなる程度ならいっその寝てしまい、何日間か暗闇の中で過ごすだけのことだったが、その年の電力不足は深刻であり、村人全員がVR空間から追い出される、つまり彼らの世界が終わってしまうという未曾有の事態となった。

世界の終末を突きつけられたスー族達だったが、当時の地方政府で問題が山積していた為に、彼らのことは後回しにされてしまった。ようやく役人が様子を見に来たのは、電力供給が止まってから実に一週間後のことだった。

数人の役人達は、VR空間の中で過ごすスー族がどうなっているのか心配もしていたが、同時に不謹慎な賭けも行っていた。それはスー族に初めて訪れた重大な危機に対し、彼らが先祖伝来のVR空間を捨て去り、我々と同じように暮らし始めていたのか、あるいはそれに順応できずに全滅などという悲惨な結果になっているのか、というものだった。

しかし、その賭けは成立しなかった。

役人達が見たのは、以前と何ら変わらず、籐座に腰掛け、彼らだけの世界に没入するスー族人の姿だった。何か非常用の機械を用意していたのか問えば、スー族の誰もが口を揃えて「なぜ来たのか」と問い返してくる。彼らは自分達の村に電力が届いていなかったことを一切知らなかった。一週間の間、何一つ問題もなく、彼らは彼らの世界の中で暮らしていたのだ。彼らがつけているヘッドセットが起動していたのか、していなかったのか、それは役人達の誰にも解らなかった。

この話は事実として語られている。そしてまた、大いにあり得る光景だと断言できる。

我々の世界が一秒ごとに連続して繋がっていると果たして言えるだろうか。僅かな間、世界が閉じている何もない状態が存在し、我々はそれを自らの脳で補完して繋がっているように錯覚しているのだとしたらどうだろうか。そしてスー族の人間にとって、ヘッドセットの充電などというのは些細な問題

に過ぎず、生まれてから死ぬまで自分達が見続ける世界を、既に脳の中で構築しているとしたら。瞼を閉じようが、機械の故障によって映像が止まろうが、彼らは自らの脳で別の世界の光景を描き続けるのではないだろうか。ヘッドセットの有無など関係なく、彼らはまるで夢を見るように自分達のVR世界に生きているのだらう。スー族の例は、我々の世界の中に別の世界を作ることが可能だということを教えてくれている。それは未だ個人の認識から離れ得ないが、やがて他者と共有できる認識が生まれた時には形を変えるかもしれない。目を閉じるだけで別の世界へ入場を果たし、そこで我々は肉体に支配されない生を得られるのかもしれない。」(p10～)

この説話を振り返れば、作者は「瞼を閉じようが、機械の故障によって映像が止まろうが、彼らは自らの脳で別の世界の光景を描き続ける（略）、ヘッドセットの有無など関係なく、彼らはまるで夢を見るように自分達のVR世界に生きている」と信じる上、「我々の世界が一秒ごとに連続して繋がっていると果たして言えるだろうか。僅かな間、世界が閉じている何もない状態が存在し、我々はそれを自らの脳で補完して繋がっているように錯覚しているのだとしたらどうだろうか（略）、スー族の例は、我々の世界の中に別の世界を作ることが可能だということを示唆している。それは未だ個人の認識から離れ得ないが、やがて他者と共有できる認識が生まれた時には形を変えるかもしれない。目を閉じるだけで別の世界へ入場を果たし、そこで我々は肉体に支配されない生を得られるのかもしれない」と作者は仮説を立てて考える。それはまさに文化が溶け合う人類の未来像を想像しているものであり、その世界観を吐露しているのであろう。自分の世界に他者の世界も「入場」でき、二つの世界が同時に触れ合い、互いに刺激し、融合しながら共有する。そこでより人間にふさわしい世界が生成できれば、現在の情報と活字の不確実で混沌としている世相と違った世界がまた新たに形成されるのではなかろうか。

2、本研究ノートの作品は、作者が民俗学と文化人類学の学問を基底にその研究方法とSF作品の方法とを合わせた手法が用いられている。民俗学と文化人類学領域の研究法では、自身の学生時代で身につけてある研究者の姿勢で、その領域のフィールドワークをおこない、中国雲南省のスー族をあたかも実在するかのように描き上げた。しかし事実においては、かれが雲南省どころか、中国すら行ったことはない。本作品のみならず、他の作品もその領域の色彩が駆使されている。例えば『ニルヤの島』については、高槻真樹は「大学院で文化人類学を専攻する研究者であり、本書には、そのもう一つの世界で得られた知識が存分に詰め込まれている」（『ニルヤの島』p360）と批評している。「火星環境下における宗教性原虫の適応と分布」においてもそういった手法が見られる。しかも「序」で始まり「結」で終わり、「役者注」までが示されていて、いかにもリアリテ性をもつ論文のような作品である。一方、『虐殺器官』などの作品で知られる伊藤計劃（1974 - 2009）の影響を受けて『クロニスタ戦争人類学者』（ハヤカワ文庫JA）を打ち出した作者が、伊藤を称賛し敬愛していることは周知されている。いわばSF作家柴田は、身に付けてある専門知識を緻密な検証によって作品に盛り込み、読者を現実と虚実の間で彷徨させている。スー族人の「ヘッドセット」や『ニルヤの島』の「生体受象」、『異常論文』¹⁰⁾の「宗教性原虫」等々いずれも、作者の想像されたVRリアリズムに過ぎない。そもそも中国雲南省には26の少数民族がいるが、スー族は存在しない。そのため、作者もそのフィールドワークをおこなえるはずがない。また、先に述べたように柴田も1987年東京都に生まれ、本名は綿谷翔太である。彼は戦国武将の柴田勝家を敬愛するためにその名をペンネームにしたのだ。いわば、研究ノート作品がバーチャルなだけでなく作者自身もバーチャルなのである。だとすれば、スー族が実在するかのようなフィールドワークのリアリテ性とバーチャルで構想されたこの作品は、読者を現実と虚実の間に往來させている。それはまさしく現代の我々の存在を示

10) 樋口恭介編2021『異常論文』217-236 早川書房

唆しているかのように思われる。メディアと SNS ニュースによる膨大な情報の中で生存しているため、その情報の点と線で繋がれると、その情報が伝達された全体像を見ようとする。だが、我々が見られるのはあくまでも実態像ではなく、それはバーチャルに富んでいる情報に過ぎないものもあると、ということである。

では、作者はなぜこうした混沌とした世界を目前にして、この神秘で奇妙な御伽噺を浮き彫りにされたのか、当然ながら、民俗学と文化人類学の研鑽を積んだ作者の志向する文化と文化の共感、人と人の共存となる人類の未来像を再創造しようとしているに違いない。その点については上の考察と分析で論じてきたスー族の暮らしと文化、アメリカの学生と語り手の交流の描写の中で十分窺えたはずだ。〈二〉章の①～⑩、〈一〉章の①～③で論じてきたように、作者はスー族に巡る暮らしと文化を考察した。かれらはチーズと麦で生命を維持し、簡素な家に住んでいるが、強い絆をもつ夫婦関係を有し、外部の文明を享受しながらも自らの文化も忘れていない。その上、恋愛についても死後についても、寛容な自由恋愛が許され、死者との間もシームレスに行き来することができる。さらにスー族文化の本質として、互いの世界を尊重し、各々の役割を果たし、平和に共存している。一方、そのような文化の根底

において、自者と他者の世界が接触し、二つの世界が溶け合いながら、より人間にふさわしい世界の再生成が可能であることを示している。そこには、作者が現在の混沌しかも先の見通しのつかない近未来の社会像を憂慮し、文化人類学と民族学の視点による文化と文化の溶け合う人類未来の着地点を新たに拓こうとする願いが込められている。その世界は平和であり、かつ穏やかな暮らしを手にすることができる」と示唆していると、筆者は考える。

参 考 資 料

- 久保明教 2025 『内在的多様性批判』 作品社
 樋口恭介編 2021 『異常論文』 早川書房
 石井美保・中川理・松村圭一郎編 2019 『文化人類学の思考法』 世界思想社
 瀬川昌久編 2012 『近現代中国における民族認識の人類学』 昭和堂
 片岡弘次編 1998 『少数民族の生活と文化』 未来社
 G・ダニエルス・渡辺武編 1994 『雲南の生活と技術』 慶友社
 秦江鵬 2022 「“空間” 到 “元宇宙” 虚拟现实科幻小说发展与流变研究」 辽宁大学